Doshisha Journal of Health & Sports Science, 10, 28-29（2018）

学会参加レポート

22nd Annual Congress of the European College of Sport Science in Germany に参加して

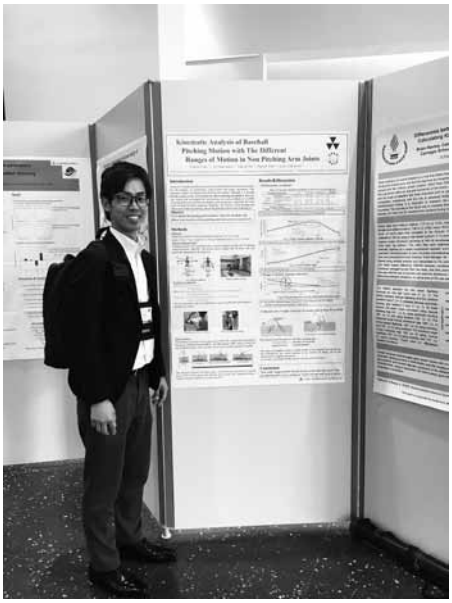
植田　篤史[1]

2017 年 7 月 5 日～ 7 月 8 日の 4 日間，ドイツのエッセンで開催された European College of Sport Science（以下，ECSS）に参加したため，以下に報告する．

ECSS はスポーツ科学分野の国際学会であり，世界各国の研究者の方々が参加されていた．また，学会会場には 日本人を含め，アジアからの参加者も多かった．今回，初めて国際学会に参加させていただいて，まず参加者の服装が自由であったことに驚いた．日本の学会では，参加者のほとんどがスーツにネクタイ姿であることに対して，本学会では参加者のほとんどがノーネクタイでジャケットとスラックス姿の方やチェックシャツとチノパン姿の方など，自由な服装で参加されている方が多く，海外らしい華やかな雰囲気であった．

本学会において，初めてポスター発表を経験した．私は，「Kinematic Analysis」というスポーツの動作解析に関するセッションで，「Kinematic Analysis of Baseball Pitching Motion with the Different Ranges of Motion in Non-Pitching Arm Joints」という演題で発表した．本研究は，野球の投球動作におけるボールを投げない側つまり非投球側上肢の可動域の違いが投球動作に及ぼす影響を検討した．ECSS のポスター発表は発表時間が 3 分，質疑応答は 2 分と比較的短い時間の中ではあったが，初めての海外で，慣れない英語での発表であったため，緊張感を抱えて臨んだ．発表後の質疑応答では，スウェーデンの研究者の方から，「実験方法の信頼性，妥当性や，なぜこの実験方法を採択したのか」に関して，説明を求められた．研究を進めていくにあたって，新しい方法で実験を行う場合，上記の質問内容を押さえて実験を行う重要性を再認識できたことが良かった．しかし，質疑応答時に，質問者の意図をリスニングして，迅速にスピーキングがうまくできなかったことが反省点であった．今回の反省点を活かし，今後は，更なる英語力の向上を目指し，海外の研究者の方と有意義なディスカッションができるよう努力していきたい．

私の発表したセッションは全てで 7 演題あり，野球の投球動作，バスケットボールのシュート動作，競歩，競泳など多様なスポーツ動作の解析に関する発表が行われていた．他の発表者の共通部分は，研究背景や研



1　同志社大学スポーツ健康科学研究科（Graduate School of Health and Sports Science, Doshisha University）

究のメイン結果の部分に関して，時間をかけて丁寧に説明されていたことであった．3 分という短い発表時間の中で，自らの研究の柱の部分がいかに興味を持ってもらえるかという点について，詳細にプレゼンテーションされていたことが特に印象的だった．

他のセッションに関して，私の研究分野である Biomechanics のセッションを中心に聴講した．このセッションの発表を聴講して，この分野の発表の背景や考察で用いられる文献がほとんど同じ研究者の論文から引用されており，この分野で押さえておくべき文献を知るきっかけとなった．また，発表後の質疑応答が日本の学会と比較して，非常に積極的であり，他の研究者間の意見交換する場面が多く見られ，私も今後の学会活動では積極的に他の研究者とコミュニケーションをとるように心掛けたいと思った．

今回，ECSS に参加して，まずはやってみることの重要性を改めて学ぶことができた．実際，英語でポスター発表をするまでの過程で，英語での抄録作成や，英語で思考し，それを基にポスターを準備することで，自らを英語で考える環境に身を置けたことが非常に良い経験となった．今後も英語力向上のため，英語で考える習慣を継続していきたいと考えている．また，私自身の研究の質を向上させ，今後も海外での発表や英文誌に論文を投稿するなど，積極的に海外へ足を踏み出していきたいと考えている．

最後に，今回，学会に参加するにあたり，多大なご支援をいただいた同志社大学スポーツ健康科学会，そして抄録，ポスターの作成や発表のご指導をいただいた中村康雄先生，博士後期課程の松村葵氏に深く感謝を致します．また，現地で大変お世話になりました田附俊一先生をはじめとした先生方や院生の方々に厚くお礼申し上げます．今回の経験を活かし，今後も社会に貢献できる研究を行っていく努力を継続していきたい．